

日本ナイル・エチオピア学会第11回学術大会・公開講演・対談

「日本とアフリカをつなぐ地平」

日本ナイル・エチオピア学会第11回学術大会は、2002年4月20日（土）、21日（日）の両日、岩手県前沢町立「牛の博物館」および同町立ふれあいセンターで開かれました。これは、学会と地方自治体が共催するという、今までにない開催方法であり、地域住民との交流を取り込んだ学会にしようという目的で企画されたものです。

開催前日の19日には、町ふれあいセンターにおいて、本学会の前会長である河合雅雄先生の原作『少年動物誌』（福音館、2002）をもとに映画化された『森の学校』（監督・脚本西垣吉春、製作・森の学校製作委員会、2002）が上映され、20日には以下のようなプログラムが催されました。

ここでは、講演・対談「日本とアフリカをつなぐ地平」から、3つの講演・対談を再録しました。

日本ナイル・エチオピア学会 第11回学術大会プログラム

日時：2002年4月20日（土）

会場：前沢町ふれあいセンター

講演・対談 「日本とアフリカをつなぐ地平」

開会式 13：15 - 13：30

第1部 ウシと人との織りなす文化

1. エチオピア牧畜民—ウシの色模様の世界

13：30 - 14：15

福井勝義（本学会会長、京都大学教授）

2. 前沢牛ものがたり

14：15 - 15：00

話し手：小形進（元岩手県前沢肉牛生産協同組合長）

聞き手：山形孝夫（日本ナイル・エチオピア学会第11回学術大会実行委員長）

アトラクション

白鳥子ども神楽（前沢町立白鳥小学校の皆さん）

15：05 - 15：20

第2部 「森の学校」と「子育てごっこ」

15：30 - 17：00

河合雅雄（京都大学名誉教授）

三好京三（直木賞作家）

エチオピア牧畜民—ウシの色模様の世界

福井勝義（日本ナイル・エチオピア学会会長、
京都大学教授）

今日は皆様本当に、春祭りの前にお忙しいところ
おいで頂きましてありがとうございます。早速ス
ライドを見て頂きながら、ご説明をしていきたく
思います。私自身、鳥根県の安来節でご存知か
と思います。安来の田舎の出身でございまして、
小さい時からウシで育って参りました。聞く
ところによりますと、前沢牛もかつてはどこか
に鳥根のウシの血が入っているというような
ことを伺って、非常にほっとしたところで
ございまして、小学校の頃はウシで犁を引
いたり、ウシに草を食べに行かせたり、
そういうところで育ったんですけれども、
まさか私がウシの世界で生活、と言いま
すか、アフリカの地を踏むというような
ことは全く考えておりませんでした。

ごらんいただいております写真は、およそ
5千年前のサハラ
の岩壁画、タッシリ
の岩壁画に描かれ
たウシの模様で
ございます。私
たち、たいいてい
黒いウシとかある
いはちょっと赤っ
ぽいウシ、ある
いはホルスタイン
のような毛色で
しかイメージが
ないと思
うんです
けれども、この
ようにたく
さんの毛の
色に関心
をもった
人たちが
いたわけ
でござい
ます。ご
承知の
ように、
動物、
野生の
動物は
一種一
色なん
です
ね。一
つの種
で一
つの色
・模様
です
けれど
も、お
よそ一
万年
ぐら
い前
に人
間が
家畜
化い
たし
ます
と、
こ
れ
だ
け
多
様
な
毛
色
が
出
て
き
た
わ
け
で
す
ね。
従
い
ま
し
て
こ
れ
は
明
ら
か
に
野
生
で
は
な
く
て、
家
畜
化
さ
れ
た
ウ
シ
で
あ
る
と
い
う
事
が、
お
わ
か
り
頂
け
る
か
と
思
い
ま
す。

今日とくにお話いたしますのはエチオピアの西南
部、ボディという社会でございまして、ご承知のよう
にエチオピアは人類の誕生の地でありまして、500
万年前後の化石が、ここ10年ぐらいに発掘されてお
ります。標高2400メートル程の首都アジスアベバか

ら南西部のほうに、車で今ですと3日間かかってまいります。気温が日陰で40度ぐらいのところをだいたい5日間、6日間歩いていくわけでありませうけれども、今は車で6時間、7時間で行くことが出来ます。調査を開始した頃は車の道がなかったんですけれども、まあ、車の跡を確認しながら、70キロ、120キロの道を、10日近くかかったこともございます。道のないようなところを登って行くわけです。

人類学って、人間の社会に入って、調査と言いますか、その社会からいろんなことを学んでいくんですけれども、どうしてもその地の言葉を習得しないと、何もわかりません。だから、「これは何ですか」というふうに子どもが覚えていきますように、私も彼らから言葉を学んでいくことがまず第一歩でございます。とにかく言葉を学びながら、彼らと親しくなって、誰と誰とがどういう関係にあるかを、時間をおいて次第に、お互いを自己紹介というような形で、進んでいくわけです。

このスライドにあるような平原のところに、お椀を伏せたような草葺の家、集落が、点々としております。こういった集落の作り方にも彼らの世界観というようなものが反映されております。例えばこの庭の東側は太陽、星、月が生まれるところですし、また、西に沈んでいきます。だから東は生まれるところであり、西は死ぬところ、死んでいくところあります。だから、埋葬する時は頭を西に埋葬します。

このスライドにありますように、ウシの乳を搾って、生活の糧を得ているわけです。それと作物、トウモロコシとか、そういった作物で彼らの生計が成り立っているわけです。彼らの夜明け前から、乳搾りの音が聞こえてきます。まだ真っ暗ですけれども、もう子どももみんな起きてきて、乳搾りとかいろいろな1日が始まっていくわけでありませう。そしてウシには1頭1頭名前がついておりまして、その名前ごとに飾りをつけていくわけでありませう。

それから、私たちの日本語では雄牛とか種牛とかそういうウシに何か名前をつけて表現していきますけれども、魚の場合ですとハマチとかブリとか、同じ種でもだんだん大きくなっていくと名前が違ってくるのがございます。ところが、ボディの場合はその生まれたばかりの子牛とそれから若い種牛、年取った種牛、去勢牛、年取った去勢牛など、全部名前が違っております。たとえば、子どもを生んだウシはヤブルといい、ミルクの出るウシはロイネ、そしてミルクの出なくなったウシを偶然ですけれど

も、ウシといたり、死産をしたウシのことをトゥカンとか、非常に細かく名前をつけているわけです。それほど彼らにとって非常に関心が深いということもいえるかと思ひます。

このスライドは、朝、放牧キャンプからウシたちが出て行くところですね。そして放牧地に向かって夕方帰ってくるわけですね。これが彼らの1日であります。で、こういうところで草を食んで夕方帰っていくわけですね。彼らはしょっちゅうこうやって移動をしていきます。そして移動するごとにその同じ集落のメンバーが変わっていく、それで近所関係のバランスが保たれているわけでありませう。

ここから今日の本題でございますけれども、いろんな色、私たちの周りをいろんな色で表現するわけですが、色々見てみますと、この中でブロンドというのはどうもおかしいという。それは何かと申しますとこれは髪の毛しか使わない表現ですからどうも普通の色の名前とは違うということですね。それでだんだんこう選んでいきますと、黄色とか白とか赤とか青とか黒、こういうのが基本的な色を表す言葉だということがお分かりいただけるかと思うんです。調査の最初の頃は言葉もわからないし誰がどこに住んでいるかもわからない、どういったところから手をつけていっていいかも分らない、ということていくつかのことから学んでいくわけですが、こういった色のことをひとつ手がかりにこれから進んでいきたいと思ひます。

色というのはご承知のように客観的というか、明度、彩度、色相といったような3つのところから成り立っております。だからどんな色も数字で表すことができる、そしてそれを比較することができるし、同じ色を再現することもできます。いっぽう、私たちは虹の色とか空の色、太陽の色、そういった自然界の色をいろいろな捉え方をしています。例えば虹ですと、私たちは7色と言っておりますけれども、日本の古代の色は赤青白黒しかなかったといわれております。いったい何色で日本の古代の人たちは虹の色を表していたのか分かりませうけれども、それぞれの社会によってこういった色の捉え方が異なってくるわけですね。それが私たちが今呼んでいる文化であるわけですね。いわゆるものの捉え方が文化であります。そうするとこのボディの社会の人たちのものの捉え方と、私たち日本の社会のものの捉えかたは異なっているということはいっても、どっちが上でどっちが下であるということはいえない、それぞれがそれぞれの意味を持っているわけであり

ます。私はいろんなやり方で彼らのものの捉え方を学んでいくわけですね。

この写真は当時4、5歳の子どもですけれども、その子どもに1枚1枚、98枚の色彩カードを見せて、名前を聞いているところです。私たちは8色とか12色の色、色彩ですとすぐ誰でも分かると思うんですけども、36枚とか色が段々多くなってきましたとどれがどの色だか分からなくなってきました。ところがボディではこんな小さな子どもでも、色の名前を言うことが出来るわけです。こうやって同じものを98枚今度はトランプをきるようにきって、今度は彼らに好きなように分類してもらおう。そして最初にやった方法とこの方法とがどれだけ一致しているかによって、どれだけ小さい子どもでも安定した色彩の捉え方をしているかがわかるわけです。そうしてどの程度一致しているかをみると、非常によく一致している。つまりこんな小さな子どもの時期から色彩の捉え方が非常に発達しているのであります。同じことを日本の子どもにやってもらっても、あるいは大学生にやってもらってもボディの4、5歳の子どもにはかなわない。それほどボディの子ども、4、5歳の子どもでも、もう十分、大人と同じくらい色彩の認識が発達しているわけでありませう。

ボディは赤、橙、紫、青緑、灰色、黄色、白、黒といったような基本語で分類しているわけです。この写真の女性はすごく頭のきれいな女性で、この方ならと思って、300色の色彩カードを1枚1枚見せたんですけれども、そうしたらその瞬間すぐにその名前を言うわけですね。私たちはうーんと唸ってしまう場合もあるし、やっぱり分からないといってしまうことが半分以上だと思えるのですけれども、彼女は全部名前を言いました。そして今度はその後で300色の色彩カードを渡して分類してもらった。2時間ぐらいかけて一生懸命こうやって分類しているわけです。

乾季になると乾いた草原を焼くんですけれども、そうすると黒く、灰が残ります。黒い焦土ですね、焼いた土地に青い新鮮な緑の草が出てきます。若い草を出すために野火を入れるんです。この状態の特定の色の表現があるわけです。これが「ティリーリ」といってるわけですね。こういう私たちにとってはこういう状態を「ティリーリ」といって、すなわち黒い焦土、土地の上に新鮮な緑、草の緑が出てきた時にどう表現するかですね、そういったところまで

深く捉えているわけです。

色以外に幾何模様もやってみました。色々自分で思いつく限りの幾何模様を作ってみました。例えば白地に黒ですと「ゲッリ」というわけですね。そして両端が黒いと「ルディ」というわけですね。そして真ん中に黒があるのが赤に、日の丸のようになると「ゲッリ」と赤と一緒に「ゲルゴロニ」というわけですね。だから例えば、両端が黒くて「ルディ」というんですけれども、それから点々模様は「コルディ」、両方あわせると「ルコルディ」というわけですね。私たちでは表現しようのないようなこういう幾何模様を彼らは即座に表現しているわけでありませう。

ところがこのスライドの4枚の色彩・模様のカードだけは理解することができなかった。そこでウシが登場してくるわけでありませう。そんなウシの模様はないんだというわけですね。このスライドでご覧になれるように沢山の毛色のウシがいるわけですね。この写真は彼らにクレヨンでウシの絵を描いてもらったところです。彼らにとって初めて鉛筆、クレヨンといったようなもので初めて描いたところです。ここになにが表されているかと申しますと、これは角ですね。角が全部描いてあります。それともう1つ重要なことは、全部色・模様で表されているわけですね。

こういうのを見て、日本では4、5歳の子どもの絵しか描けないんだといって、彼らにとってのウシの絵、ウシというのは私たちにとっては4、5歳ぐらいのウシの捉え方なんだなと思ってしまうと大間違いなんですね。これが真ん中に黒いブチがある「ゲッリ」。これが左足の白い「エルディ」といいます。これが腹が白く他が赤いので、「パーシ」。ウシがいろんな色模様によって分けられているのです。

前沢牛の中に鳥根のウシが系統的に入っているということをたまたま今日伺ったのですが、ボディのウシも全部系譜がはっきりしているわけですね。例えばここに腹が白くて他が赤いウシがいます。「バゴロニ」といいます。それにモジ、こんな色をモジといいますがそのオスを掛け合わせると、子どもはお母さんと同じ腹の白くて他が赤い「バゴロニ」が出てきます。そうして今度はお父さんは真ん中にブチのある「ゲルゴロニ」と交配しますと今度は赤い斑点の「キリンディ」がでてきたわけですね。こういうのをほとんど知っているわけでありませう。そうすると彼らは、親子を通じたどの親とどの親とを交配するとどんな模様のウシが出てくるかを知ってい

るに違いない、すなわち遺伝観を持っているだろうと思ひ聞いてみたんですけれども、そうすると白いウシと両端の黒いウシを掛け合わせると必ずこの黒いウシ、「ルディ」が出てくるというんですね。同じように白いウシと真ん中にブチのある「ゲッリ」を掛け合わせると必ず「ゲッリ」が出てくると。

これは現代の遺伝学でいいますと白は劣勢であります。それからブチは優勢でありますから、子ウシには優勢の「ルディ」が出てくるというようなことを、私は動物遺伝学の野澤先生から学んだことがあります。全部こういうウシの毛色は遺伝子に置き換えることが出来て、検証することが出来るわけであります。ボディのこうした民族遺伝観を、遺伝子記号に置き換えて検証してみると、現代の遺伝学となんら矛盾することがないということを、野澤先生は十分裏付けられると仰っていました。ボディの社会ではああした何百年、何千年前から分かりませんが、沢山のウシの毛色を一つ一つ学ぶことによって、さらに今度は親と親の掛け合わせによって、交配によって生まれてくる子どもの色模様を観察して次の世代に伝え、それを何世代も伝えることによって、メンデルの遺伝の法則が見つかるはるか以前から、現代の遺伝学とも照らし合わせても矛盾のないものを彼らは学び取っていたわけでありました。

このスライドの子ども達は4、5歳の子どもだと思ひますけども、ご覧になれる様に歌って踊っているわけです。子どもたちは生まれて満1歳の時に名付けとともに特定の色と模様を名付け親から貰うんです。そうすると満1歳から社会教育が始まっています、こうやって歌を作ってもらいます。首にはピーズを掛けてもらいます。例えばこの写真の子は前が黒で後ろも黒なんです。したがって「ルディ」という模様です。それをつける。彼の生涯を担う色模様は「ルディ」なんだと。そういうことで、みんな満1歳、ものごころがつく頃までには、自分の色がなんであるかを知って、ものすごく興奮するというか、愛着をおぼえていくわけでありました。やがてこの頃になるとその辺に落ちている色々な色模様の石ころを集めてきて、色模様ごとに分類するわけです。だから、あの98枚の色彩カードを4、5歳の子どもでもなんの問題なく分類しているわけですね。それは彼らの日ごろの遊びの中でこういったことが行われているわけですね。そしてこの遊びの中で彼らは色と模様を学んでいくのです。

ところがもう1つスライドをみてみますと、この石ころがですね、柵で囲まれているんですね。これは何かと申しますと、最初で言いました、彼らの放牧キャンプを模倣しているわけですね。夢見ているわけです。そのなかにそれぞれの石ころがウシに見立てられているわけですね。自分達が大きくなった、大人になった、あるいは若者になったときを夢見ながら、彼らは自分のウシをこうやって飼育しながら遊んでいるわけですね。だから、この遊びの中には色模様の分類だけではなくて、彼らのウシに対するものの捉え方の習得といったような、そういったことがここに含まれているわけです。そして、学校教育はありませんけれども、彼らは高校1年くらいの歳になると、満1歳ころに名付け親からうけた特定の色模様の子ウシを入手します。そして大事に大事に育てるわけですね。彼らにとって青春の生きがいは紛れもなく、この自分にとって生涯を担う色模様の子ウシを立派に育てることでありました。こうしてこのウシに向かって長い長い詩を吟ずるわけですね。そこは韻を踏んだような長い詩で、ウシを愛でるわけでありました。

そしてもう一度自然界に戻りますけれども、自然界の色模様とウシの毛色が対応しているわけです。例えば、これはこういうギザギザ模様ですけれども、自然界ではどんな色模様かと申しますと、これは稲妻を表しているわけですね。だからこの毛色は稲妻と結びついているわけです。雨乞いの時に、雨がどうしても降らないときは、こういった稲妻を呼ぶウシを犠牲にして雨を呼ぼうとするわけです。あくまでもこれは彼らの自然界の捉え方なわけで、それを儀礼を通じて合理的にやっついこうとするわけですね。そういったときにウシを犠牲に殺すわけですけれども、石で頭を打って解体していくわけですが、その時にほんと不思議なんですけれども、ウシは静かに死んでいきます。普通もっと暴れてもいいと思うのですが、ここでは本当に静かにウシは死んでいきます。そしてウシを儀礼で殺す時は自分達の周りのウシの目の前で殺すわけですね。そしてウシはじっと殺される過程をみているわけです。これを私は不思議でならないんですけれども。

彼らの社会からいえることは、彼らの社会が色と模様で捉えられていて、そのそれぞれの色と模様が結び合って彼らの世界が成り立っているわけですね。そして、例えばボールペンを持っていたとしま

す。そうしますと、彼らはすぐにボールペンの話をしてきます。その色と模様はなんなんだというわけですね。そういわれてもボールペンにはいろんな色があるからなんといいたらいいかなあと思うと、彼らは、ああ、こいつはまだ我々の社会を分かってないんだなというようにいうんですね。それは、こういう彼らの社会というものは色と模様を通じて、そしてウシが深く結び合って彼らの社会が成り立っているということ。そしてその中で特定の色模様がウシと結び合って、生きがいですね、生涯と結び合っている。

これはスーダン南部で私がしたことですけども、ある種ウシに対してある長老が朗々と詩を吟じているわけですね。そしてその翌年に行くとその長老は亡くなっていたんですね。そしてその立派な種ウシはどうなったかと思って聞きますと、その長老がなくなったときにその種ウシを殺して、皮で長老を包んで埋葬したというんです。そうしたウシと人間の、なんといいですか、ウシの生きがい、人間の生きがいというものがここに表れているとおもいます。

彼らの精神世界は色と模様を通じて、さらにウシを通じて豊かな世界が育まれているわけです。だから彼らの社会に行きますと、彼らのプライド、誇りに圧倒されます。どうして皆こんなに生き生きしているんだろう。私たちはたまたまこういう服を着たり、あるいはカメラを持ったり、ラジオを持ったりなんかして、そういうことを思うんですけども、彼らの目の前に行くとそのことってというのはもう打ちのめされる印象を受けるんです。おそらくそれは彼らの社会では、そういった色と模様、ウシを通じた、あるいはその中に先程の子どもから大人に至る過程の中で培っていく誇りというか、生きがいというものがはっきりと見られるということでありませう。

ということでもとに戻りますけども、このサハラの5000年前に描かれたサハラの岩壁画のウシの模様、これだけ沢山のウシの模様に彼らが関心を払ったことは一体どういうことなのか、ボディの今の社会から想像しますと明らかに彼ら人間とそしてウシの世界がこうして色と模様で深く結びついて、彼らは生き生きと生きてきたのかと想像させるものかなと思います。そしてポスターの写真にも出させていただいたんですけども、この写真は満1歳のうちの息子であります。そして対面しているのはお

そらく3歳くらいの子もだと思えるんですけども、このころはまだお互いの社会のものの捉え方っていうのができてないわけですね。この時からお互いのものの捉え方を学んでいく。私のところの息子は今20歳でありますけれども、そういった子どもが大人になるということはそれぞれの社会のものの捉え方を学んでいくことなんだ、そして大人になることはお互いに共有のものの捉え方によってお互いの社会が成り立っていくんだということを、ボディの社会をもとにして皆さんにご紹介させていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。

前沢牛ものがたり

話し手 小形進

(元岩手県前沢肉牛生産協同組合組合長)

聞き手 山形孝夫

(日本ナイル・エチオピア学会

第11回学術大会実行委員長)

山形：今日は、前沢牛の育ての親で岩手県家畜農業協同組合の組合長さんをしておられた小形進さんに、どのようにして前沢牛を前沢の名産として市場に売り出し、日本中に前沢牛の名を高らしめたかを、ものがたりのように伺いたいと思います。

小形さんは現在77歳になられまして、いろんな役をすでに引退されていますが、以前は前沢牛オガタの会長でもあり、小形畜産の会長でもあり、小形牧場のオーナーでもあったわけです。今は全てご一族に譲られて、自分はもうたった一人の人間に戻ったとおっしゃっていますが、牛を見ると手が出て飼いたくなるとボソッともらしておられました。今日は、そんな小形さんの若いときから現在に至るまでの歩みをたどっていきたいと思っています。

小形さんは、生まれは北海道で、開拓農家の斉藤家の五男として大正14年、1925年にお生まれになりました。その斉藤家が故郷の新潟へ舞い戻ってくるのが、小形進さんが5歳の時、昭和5年。小さい時から家畜と一緒に過ごしてきた記憶は非常に鮮明だそうです。それで小形さんは今でも、鶏とかウサギとか馬とか牛と話ができる、牛の言葉を聞き分けることができる、ということを私に申されました。小形さんは牛と話をすることができるんですね。

小形：そうです。牛は人間と違って言葉はできませ

ん。牛と話ができるということは、牛の行動を見て、牛を知る、心を知る、考えを知る、ということなんです。牛というものは、3メートル、4メートル四方の中で肥育されるわけです。そうすると牛も暇が十分あります。色々考えているわけです。それを牛が言っているんですけども、飼っている人が分からない。そんな人が牛を養っていて儲かるわけがない。私のところでも4、5人若い者がいますけど、誰も分からない。

昨日の朝も、牛舎にちょっと行ってきました。そうしたら牛が全部、私の方をずーっと見ていました。この人は牛と話のできる人だと牛が思ったから見たのだと思います。若い者が入ってきたら、見ないんです。やっぱり牛もよく知っています。そういうことでやっぱり牛にも期待され、それに応えるというのが、牛と人間の対話かな、と考えています。

山形：進さんは20歳で兵隊に行き、1年間、馬の世話役をして神奈川で終戦を迎えました。そして昭和23年に馬喰（ばくろう）をしていたお兄さんに連れられて、初めて新潟から岩手県の前沢に行きました。これが前沢との最初の関わりなんですね。

そこで初めて小形盛（さかり）さんという前沢の家畜商の方と出会うわけです。小形さんと知り合まして、そして、小形さんの手引きで初めて北海道に渡って馬の買い付けをした。昭和23年です。その頃の前沢は牛ではなく、もっぱら馬なんですね。肉牛はほとんど育ててない。

小形：前沢には馬の馬喰と、牛馬喰がいて、小形盛は馬専門。牛は牛馬喰さんが専門でやりました。

山形：進さんは小形さんの手引きで馬の買い付けからはじめられたというわけですね。

小形：そうです。昭和24年の夏は馬の相場がまあまあ高かったわけですが、その秋から馬の相場が急激に下がりました。北海道から馬を持ってきても値段が折り合わないの、ためらっていたわけです。そうしたら11月になって雪が降ってきました、早く馬を下げてくれと北海道から幾度も催促の電報がきたので、行ってこいと言われて、初めて釧路の標茶というところに行きました。

山形：その時大儲けしたって話が伝わってるんですが。



前沢牛

小形：大儲けしたっていうのはその後、25年の年です。25年の年はひじょうに儲かったものですから、また標茶に行こうと小形さんに言いました。6月20日過ぎた頃だったと思いますが、借りてきた20万円と合わせて70万円をもって、標茶に行きました。そして連絡船に乗った時、朝鮮動乱が始まりました。朝鮮動乱が始まれば釧路・根室にソ連軍の軍隊が上陸するだろうということで、ほとんどの馬喰が引き返しましたし、小形さんも帰ろうかと考えたようですが、やはり標茶に行こうということになりました。

3日間のうち2日間はセリになりませんでした。全くこちらのいいなりで、いくらで買えるということで、そこで53頭買いました。

山形：ああ、そういうことがあったのですか。

小形：70万の金で53頭買って、16頭売って45万になったと思います。そういうことで儲けたんです。それが25歳の時。

山形：25歳で、もうそういう目利きだったんですね。進さんは子どもの頃に新潟に住んでいて、朝鮮から来る牛をたくさん見ていました。その頃肉牛に対する関心というのは東北人にはまだなくて、牛肉は食べものではなかった。しかし、新潟の馬喰の町に住んで、朝鮮から入ってくる牛をたくさん見ていて、時代が徐々に馬から牛に動きつつあるんじゃないかということを感じたとおっしゃられてましたが、そういう予感というのは早くからやっぱりあったのでしょうか。

小形：ありましたね。馬というのは、起きるとまず草をやって、ご飯の時にやって、またタバコといって食べさせて、お昼食べさせて、タバコを食べさせ

て、また夕飯を食べさせて、そして寝る時食べさせて、というようなわけで6回も7回も食べさせるわけです。その点牛は3回食べさせれば、もう終わり。今は2回です。牛は質素だし、肥育法も簡単。しかもおとなしい。というわけで、馬とかなり違う。そんなことを考えてました。

それに私の育てられた新潟の漆山では、すぐ近所で朝鮮に行って牛を買ってくる馬喰がいました。その人は兵隊に行って朝鮮牛を知り、それから買ってきたといっていました。そんなことで、牛はよく見ていました。他にも馬の馬喰で、若い衆5、6人を置いている人がいて、馬喰というものは非常に勇ましいものだと思っていた。それが岩手に来て、小形盛という人を見てこれが(有名な)岩手の小形盛かと思いました。なにしろはつきりモノという人で、なかなかの人だなと私は感心したわけです。

山形：そうですね。それじゃあその小形さんに会われて、小形家の婿養子に入ってその小形家の当主と一緒に仕事するっていうことは、すごく喜びだったですね。

小形：まあ、喜びというよりもやっぱり私は生き物が好きだったですから、自分のかかよりも牛のほうが好きだったかもしれません。

山形：さて、進さんは、若い頃ひと月で20頭から30頭の馬の取引を1人でやってきたそうです。ひと月に20頭から30頭というとこれは忙しいですね。

小形：そうですね。今の若いのを見ると6時頃から起きてポツポツですが、私の頃は夏であれば3時半か4時。それから、食堂というものがないませんでしたから、馬喰という商売では食事は1日2回で我

慢しなければいかな、というように考えていました。

山形：牛と同じですね。

小形：でもやっぱり、勝負が好きでしたから。それは抵抗ありませんでした。

山形：そうですね。その頃小形家の屋敷はその一部が馬のセリ市になっていたんだそうですね。それほどこの前沢の中では馬の売買が盛んで、その中心に小形盛さんがいたということですね。当時の日本を振り返って見ますとちょうど戦後10年目です。日本はようやく復興しつつあるところですよ。当時の小形さんは岩手の馬を九州へ、そして九州の牛を今度は岩手に移送する。そういうことで1年中家にじっとしていることがなかった。奥さんから話を聞きましたら3ヶ月も4ヶ月も帰ってこない。で、どこに行ったかもわからない。馬を連れて売り歩き、そして売った先で牛を買ってそれを貨車に乗せてこちらに送る。東北から九州そして関西を動き回っていたんですね。その当時は買った牛、売るための牛は全部貨車で移送するわけですね。九州からですと6日間ぐらいかかったんですね。

小形：当時ね、九州の都城から日豊本線を通らずに熊本の方を回って、貨車で5日泊まって6日目の朝に前沢に着きました。北海道の場合は8日から9日かかりました。

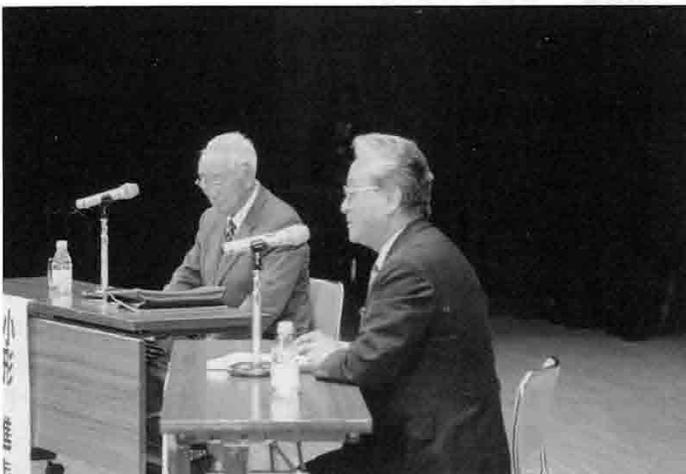
山形：6両ぐらい連ねていくんだそうですね。1両に馬はどのくらい積めるんですか。

小形：2才馬の場合だと17、8頭。子牛の場合だと、27、8頭から30頭ですね。

山形：随分違うんですね。

小形：違います。大きさが違いますから。

山形：そして昭和40年代に入ります。この頃になりますと、小形盛さんは肉牛の肥育にのりだし始めます。肉牛5頭から始めたそうです。当時和牛の肥育は、日本全国あちこちで徐々に高まりつつあって、和牛の名産地といわれるところがぼつぼつとではじめる。で、その時に進さんは考えました。家畜商としてはもう馬では駄目だ。必ず和牛肥育の時代が来ると。だから和牛を知らなくては駄目なんだということをその頃つくづく思ったと、おっしゃっています。当時有名だったのは、但馬牛とか、鳥取牛とかそれから先ほど講演



小形氏・山形氏

をされた福井先生のご出身の鳥根県の鳥根牛というのがあります。それから、鹿児島牛などというのもその頃名前が出ていたそうです。そういういろいろな和牛、黒毛牛が、改良されて各地で競うようになっていた。

— そういう中で前沢牛をどうすればいいかということをお小形進さんは考えて、そこから努力を始めます。小形さんがおっしゃるには、前沢には牛はなかった。けれど、なかったからできた。つまり、いろんなよその牛を交配させることによって、全く違ったものをつくれればいいということに気がついて、どのような前沢牛をつくるか頭にひらめくことがあったと言うのです。これは先見の明というか、それぞれの土地の牛飼いたちが伝来の牛にこだわっているその時に、前沢で全く違ったタイプの新種の牛をつくっていかうと考えられたんですね。

小形：私は主に鹿児島、宮崎、大分の一部を中心にして牛を買っていたので、お客さんは東北、関東にはいませんでした。南の首都大阪の貝塚、堺とか、姫路、尾道、鹿児島のお客さんが多かったと思います。そして、四国の人、高知の人、徳島の人、やっぱりそれぞれの見方が違うわけです。改良和牛というものはそこら辺を考えると、ひじょうに肉質もよし、結局日方もでる、また発育もいいという牛なんです。和牛の進歩もたいしたものですね。これはやっぱり褒めておかなくては。私が初めて今の品川、芝浦（東京食肉市場）にいったときは、だいたい目方で馬であれば60貫70貫、牛は5、60貫だったんです。5、60貫というと、230キロ、250キロぐらいなんです。それが今は400キロ、500キロという体重の牛が出てきている。だから倍の牛になりました。それだけ進歩したということじゃないでしょうか。

山形：このように、前沢牛をどうつくるかを考えて、それまでの馬を売ったり牛を買ったりというのではなく、方向転換をしまして、家畜商自らが自分の手で牛の肥育をやろうと、完全に頭を切りかえてしまったわけですね。そこから肉牛の肥育への小形さんの努力が始まります。昭和48年、1973年に前沢肉牛協同出荷組合というものを作りまして、進さんが初代組合長に選ばれました。そして昭和49年から平成13年までの間に28回を数える東京の食肉市場で催された共励会・共進会で、前沢牛が次々と優秀牛に選ばれ始めるんですね。それから10年経って、昭和58年に全国肉用牛枝肉共励会という全国的な会が東京に結成されて、そこでも前沢の肉牛

が連続して次々と名誉賞を獲得していった。昭和60年代から平成の初期にかけて前沢牛の黄金時代が始まるわけです。そして小形さんの小形牧場も4年連続して全国の優秀賞を受賞しまして、平成2年には名誉賞という最高賞を獲得しました。これまで前沢町の牛は過去6回名誉賞を獲得しているそうですが、このようなケースは全国的にも例がなく、前沢牛は日本中に知られていくようになりました。そして、そういう流れの中で平成7年に全国でも比類のない前沢町立牛の博物館が完成するわけです。ちなみに平成10年度に東京に出荷した前沢牛932頭のうち小形牧場の出荷頭数は45パーセント。約半数に達しています。現在どのくらい牛はいますか。

小形：650、60頭ぐらいだと思います。だいたい1ヶ月30頭出荷で年360頭出荷という目安です。

山形：小形さんから伺った言葉の中に、こういう言葉があるんですよ。牛の肥育っていうものは、資本の勝負なんかでは全然ないんだ。牛と話をすることなんだ。牛の耳を見ながら牛と対話すると上手くいくと。決してお金の問題じゃない。資本の問題じゃないと。

小形：その通りだと思っています。資本金があったからといって、やれるというものではない。やっぱり人間と牛との出会いって言うんでしょうか、牛というのは自然だとだいたい12、3年から15年生きるんです。それを3年足らずで命をカットするわけです。だからそれを13年、15年っていうわけにはいかないけど10年分を3年間に縮めてしまうのだという気持ちじゃなかったら、やめたほうが良いと私は思っています。その気持ちがなかったら結局金儲けだけになり、牛も報われないというふうには私は思っています。

山形：さきほどは会長の福井さんから、エチオピアのボディ族の子供達が自分の運命と牛の運命とを一つの絆のように考えて人生を生きるというお話を伺ったんですが、前沢でもこのように牛との絆で生きている人がいるんだ、ということをお小形進さんを通して知りました。改めて人間と牛との織り成す文化っていうものの大きさに感動し深く心を集中させることができたと思います。どうも小形さん有難うございました。

小形：ありがとうございます。

*「馬喰」について：近年では「家畜商」が一般的ですが、対談の時の雰囲気伝えるためにそのまま「馬喰」を使用しました。

「森の学校」と「子育てごっこ」

河合雅雄（京都大学名誉教授）

三好京三（直木賞作家）

三好：河合さんよろしくお願ひします。面白いご縁だと思ひました。実は私、昨日、北京から帰ってきたばかりです。北京で栗原小巻出演作品の映画祭が行われたんですね。『子育てごっこ』という私の小説も映画になりました、これに栗原小巻さんが女先生として出演くださっているわけです。その映画も映していただけるというので、女房と一緒に行ってまいりました。そして、他の映画もみて、涙して、私のようなものの作った原作が映画になって北京の皆さん、中国の皆さんに見ていただいた。感激して帰ってきたわけです。そしてすぐに昨夜、映画『森の学校』を拝見いたしました。ああ、こんなに自然と親しむ、そして病気がちの小学生時代を過ごしたのに、いざ喧嘩となると中隊長の息子もぶっ飛ばすような、素晴らしい少年がいた。感動しました。そういうわけで、今日は、学会というのは今までお聞きしたり、見たりして、肩肘張って、力んだ討論するばかりじゃない。楽しみながらお話を伺っているのだという風に少々安心しましたので、だいたい、河合さんの本にも触れながら河合さんの少年時代、或いは青春時代という風なお話をお伺ひしたいと思います。よろしくお願ひします。まず、どうして身体が弱いのに山や川が好きだったのか、これは兄弟のせいですよね。

河合：そうですね。子供の時に本当に自然が好きで、動物も植物も好きでした。それで植木も好きで、よく植木市なんかに親父が連れてってくれたんですが、子どもの頃は家の中ではウエマサなんて呼ばれていた。植木屋のまさやんですね。自然好きは生まれつきかもしれませんね。兄弟もほんとに自然好きが多かった。私は男ばかり6人兄弟で、私は三男、五男の単雄っていうのが心理学をやりましたが、彼なんかはあんまり好きじゃない。好きでも嫌いでも何でもいいから、常に外に引っ張り出していました。かれはよく言うんです。「いやー、わしは生まれつきあんまり外で遊ぶのは好きじゃなかったけども、引っ張りまわされているうちにやっぱり自然が好きになった」と。まあそういうところがあるんですが、私はもう、本当に好きだった。ところが、病気はですね、小学校3年の時に小児結核になった

んですが、これは本当に不幸なことでした。小学校1年の時に兄弟全部百日咳にかかったんです。百日咳っていうのはもちろん薬なんてものはないですよ。家中の子どもがごほんごほん咳をしていた。あの当時はカラスガイっていう大きな淡水性の貝がおりますよね、それを採ってきて焼いて食べるのと効く。それで当時のことだから炭火で焼いて、母親が焼いてくれましたよ。ちょうどアワビくらいの大きさがあります。あの匂いは今でも懐かしいというか、ちょっとした郷愁を覚えます。私は特にひどくて、咳をすると鼻血が出たんです。あまりにひどくて貧血状態になったんです。今だったら色々サプリメントや栄養剤がありますから、貧血も治しやすいでしょうけど、あの当時は貧血で身体が弱っちゃったから結核になったんです。母親に言わせると、幼稚園くらいまで非常に健康だったといっています。が、もともとは上等に生んでもらったんだと思うんですね。ですから、腕力だけは強くて、それから運動もさせれば、例えば走れば1番、跳んでも1番だったんだけど、すぐダウンしちゃって選手には全然なれない。そういう点ではかわいそうな子どもだったと思います。ただ、本当に自然が好きで、鳥も虫も魚もみんないい仲間でしたから、それが自分を支えてくれたと思いますね。

三好：幼児期はご丈夫でいらっしゃった。

河合：ええ。幼児、小学校1年ぐらまでです。

三好：実は私も中学2年生のときに結核にかかりまして、一関中学というところですが、そこを休みすぎると落第しますね。ですから学年を1年後れました。先生がお丈夫だったのに小児結核になられたのは、やっぱり結核は伝染病だからですよ。生来お弱いというよりは小児結核で、つまり伝染病で学校にあまり行かなくなっただということになります。私の親も結核で死んでおりますし、それで結核仲間という親しみを覚えたわけではありますが、それにしても幼児期にいい育ち方をなさったから、喧嘩やっても勝つような強さがあられたんだと思います。あの『少年動物誌』を拝見しても、それから昨日の映画にもありましたが、スモモ泥棒の場面であのゴリラというおじさんを巻いたところは面白かつ

たですよ。私もよく北上川に泳ぎに行きました。やはり途中暇ですから、葡萄畑がありますと葡萄を頂いたりしたのですが、河合さんもスモモの魅力には勝てなかったといいますが、あのへんの映画はとても楽しかった。

河合：三好さんは小学校の先生をなさっていますからよくご存知でしょうけど、とにかく子どもってというのはちょっと悪戯したいんですよね。だから、エンドウを盗ってちょっと食べるとかですね、それほど美味しくないんですよね、エンドウの生ってというのは、

ところが怖いおじさんがいて、こらーっていうのを、目を盗んで盗ったときのあの味っていうのはものすごく美味しいんですよ。それで城にあるスモモは、特にゴリラっていう怖いおじさんがいたから、あのおじさんの目をくらまして盗るっていうことは、これはもうすごい快感なんです。ちょっとしたヒーロー気取りなんです。子どものときってというのはたいていの人が悪戯好きっていうか、そういうことをやったんじゃないでしょうか。それで、昨日も言いましたけど、あのゴリラおじさんが結局は子どもを温かい目で見ているっていうのが、あの当時のとてもいいところだったと思いますね。

三好：皆さんご覧になったと思いますが、私はほんとにあそこで感動しました。ゴリラって言われるほど怖いおじさんですが、学校のカバンを忘れたのを、持って来てくださったんですよ。そこで、先生もご本でおっしゃっているように、ああいう付き合いの中でいわゆる社会性も育つ。ゴリラのおじさんは優しい人だったんだなあ、という感想を持つ場面なんか本当に感動的でした。そして、どなたもあの映画をご覧になったり、或いは先生の本を拝見したりして、なつかしの少年時代、少女時代を思い出されたと思いますが、私も、田のあぜ道に沿ったセキ、この辺でセッコって言いましたが、そこでよくフナやドジョウを捕りました。そしてそのドジョウを喜んで祖父が食べてくれると、わあ、いいなと思いましたし、それから、やっぱり釣りにいったり、先生の本にも、手掴みするっていうのがありましたね。ウナギなんか手掴みなさいましたよね。それで、私を川へ連れて行った4級、5級ぐらいの先輩、高等科の先輩はあぜ探りと言いまして、川のあぜを手で探って、ウナギを掴みました。私はそれを思い出しました。やっぱり先生は魚や小鳥は手で捕るべ



河合氏・三好氏

きだというふうなことを書いてらっしゃいますよね。

河合：そうですね、あれは一騎打ちみたいなのところがあるんですよ。向こうは向こうでももちろん逃げたいし、こちらはこちらで何とかして捕つたろうっていうのがあるわけで。それで『少年動物誌』の中では、1つの象徴的な題材として「タヒバリ」っていうのを書いたんです。空気銃をもって追っかけまわして、向こうが疲れ果てると、何とか近寄って、ほんともうポロの空気銃ですが、撃てるっていうときに止めて、こっちが飛びかかっていくという話です。子どもの気持ちっていうのはそういうもんだと思うんです。魚掴みもほんとに好きでして、だいたい大きな岩や石の下にいるのを捕まえるんですけど、手を入れたときに魚がちょっと触れたり、ヌルっとしますね。あれがほんとに楽しい。魚はなんとか逃げようとするが、なんとかこっちは捕ろうとする。一種の小さな戦いです。私は子どもが3人いるんですけど、3人の子どものにやっぱりこれぐらいは教えておかないかと思ひまして、魚のつかみどりは娘にもそれを教えました。

三好：私はこういう田舎町に生まれましたが、山村はさらに田舎だという風に言われます。その僻地の分校へ、女房と一緒に小説『子育てごっこ』を書いた分校に行つたんです。そこで分校の子どもたちが、勉強が得意でなかったのは、本人の才能がないのではなくて、前の先生の教え方が悪からだということがはっきりしました。そして何よりも、私は小説家になるためには人間を客観的に見つめなければいけない。だからお世辞ばかり言っていないで、良いところも悪いところも冷静に客観的に見つめてそれを書く。そのつもりだったんですが、意地悪に見

るのが客観的という風に、思い込んでいるふしがありました。そして、僻地・分校教育研究会に行くと、先生方が僻地の子どもはみんな成績が悪いと、悪口ばかり言うんですね。それを聞いたら非常に腹が立って、いや、僻地の子どもは才能がないのじゃない。特にわが分校の場合は、先生の教え方が悪かったんだ。実際前の先生は村人のお世話ばかりして、お茶ばかり飲んで、自習ばかりさせていたので、その結果子どもたちの学力がつかなかったのです。それで私は、よし、この分校の生徒の良いところばかりを研究会で発表しようと思いました。これは探さなくとも分かりましたね。魚捕りなんか、みな名人でした。1年生なのに高い木の枝にぶら下がったり、そこから宙返りしており、まさに自然の中での遊び方は名人でした。ですから、掛け算九九とか漢字の読み書きが出来ないのは先生の教え方が悪いだけです。分校の生徒は自然との遊び方の名人で、イワナなんてすごい川魚を手掴みしたり、河合さんも書いておられました、ヤスで捕ったりですね。それから夜、針をかけておいて、翌日行くとウナギやイワナが釣れている。それらを私は分校の生徒たちから学びました。それで、分校なんか1年でおさらばして楽な学校に行こうと思っていたのですが、その分校が大好きになりました。子供たちは働き者で、自然との遊び方の名人で、我慢強く頑張ればたちまち本校に追いつくような学力も獲得しました。そういう意味では良いところを見つける、その中に子供たちの自然との接し方がありましたね。

河合：三好さんが書かれた『子育てごっこ』は、だいぶ前に拝見したのですが、今度はあの『分校物語』というのを読ませていただいて、本当に感動しました。あの分校の子供たちは駄目だ、学力できない、と皆さんこう決めつけてたんですね。

三好：決めつけていました。

河合：ここに書かれていることは、小学校5、6年で国語ができる子が3分の1以下だとか、漢字は簡単なことも全部ルビをふるとか、なんか、まともな人間として扱ってなかったっていうような気がする。それはまともな先生の感覚では、ちょっと我慢できない。ふつうは許せない、と思いますけども。

三好：小さな学校では、1、2、3年生をまとめて一人の教師がみる。それから私は4、5、6年生。それを3複式といいましたが、45分の中で1学年につき15分ずつしか教えられない。そうすると、例えば東京の学校では生徒は45分間の1時限をまるまる教わる。田舎の分校では3分の1しか直接先生から教

わらないから、3分の1の学力しかつかないかといえば、やっぱり教え方があって、後の30分は自習できますから、よい自習の仕方、先生と一緒に勉強しているのと同じくらい学力がつく自習の仕方を教えておくと、単式の学級に追いつくことができますよね。僻地複式分校教育研究会というところがあって、そこで勉強しようとする、先程申しましたように、僻地の子どもは勉強ができないという悪口ばかりなんです。それで、このよう先生は駄目だと思いました。よい先生でないで単式でも複式でも、田舎でも都会でも、児童生徒は不幸ですね。前沢の隣の衣川の大森分校の子どもたちはみんな自然との遊び方の名人で、働き者でとてもいい子供ばかりでしたが、前の先生の教え方が下手で、自習ばかりさせて、1時限の3分の1の授業もしないので学力が低かった。僻地教育全国大会に行ったとき、愛知県の先生で、わが分校は本校よりも成績がいいという先生がおりまして、わあ、すごいなあと思いました。ですから、やっぱり学力は教師の力量によるところがありますね。

河合：複式ってのは確かに難しいと思うんです。少人数学級ですよ。分校では38人くらいを1年から6年まで分ける。だから1学年5人とか6人とかですね。上手にやればほんとに上手くいくし、下手すれば1年と6年をどうやっていいかなんて、先生は混乱して嫌になるということが起こりえますね。

三好：そうですね。昔は50人も1学級にいて、先生がとても1人1人に手が回らないでいました。ところが、河合さんがおっしゃったように分校は複式で人数が少ないから、1人1人に目が届くという良いところもあったわけです。

河合：結局教育の基本は何か、どのようにして教えればよいのかという問題ですが、三好さんは、1つの非常にいいことを仰っていると思う。褒めることだと。あれはすごく大事なことです。人間って自分自身に対しても人に対しても、欠点や短所は非常に分かりやすいですよ。ところがいい所するのは分かりにくい。自分自身のことは分かりにくいから、何かいいところがあるのだから、それを見つけるのを手助けしてあげるのが、先生や親や友だちだと思うんですね。だからいい関係を作って、その子の良いところを見つけてあげる、これが多分一番大事なことでしょ。私は思うんですけど、人の欠点とか短所は直らない。どんな人も直らないと決めてしまったほうが良いと思うんです。今まで日本の教育っていうのは、欠点、短所をできるだけなくし

ていこうと。なくしてしまえば人格円満な子どもになる、あるいは人間になるという教育が多かったと思うんですね。そうじゃなくって、もうそれは直せない、だから良いところを見つけて、良いところを伸ばしてやる。そちらのことが大事だと思うんです。例えば、欠点、短所というのは自分の人格から出ている棘みたいなものですよ。なくすっていうのは、これを切るようなもんですよね。そうとう血が出て、非常に醜い癍痕になる。けれども、良いところを伸ばすのは、欠点、短所を置いたまま、良いところを増やして行って、これを全部覆っていくとかえってその人の欠点や短所っていうのは、その人なりの人格の彩りみたいになる、そんな感じがするんですよね。

三好：確かにそうですね。その褒めることについてですが、私は岩手県の北のほうの学校に勤めている頃は、非常に乱暴な教師だったんです。しかし、みんなと教育研究をしているうちに、少しずつ教師らしい勉強の教え方が分かってきました。ある時非常におどおどした子どもを大げさに褒めたら、非常に元気になり、いじめられてばかりいたものがいじめっ子に言い返すほどでした。これは朗読をちょっと褒めたのですが、確かに褒めることが大事だと思いました。良いところを褒めている間に欠点が個性になるというような河合さんのお話、とてもよかったです。

河合：よく、日本では、日本人って非常に優秀な民族だけど獨創性が育たないとか、個性が育たないとかいわれますよね。その1つは基本的な教育方針にあると思うんです。例えば、日本はいろんな徳目をあげてそれを全部やらなければならない。いちばん象徴的なのは、僕らの子供の時に教えられた教育勅語なんですね。今でも覚えてるんです。「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭儉己ヲ持シ」とかね、いいことばかり書いてあって、それをやったら確かにすごい立派な人になるでしょう。だけど、それはいわゆる君子聖人の人格像を描いて、それに皆なれということなんで、それは無理だと思うんですね。全ての人が君子聖人的になれたはずがない。なのにそれが出来なかったお前は駄目だっていう言い方になっちゃう。ところが欧米の、例えばモーゼの十戒というのがありますよね。汝姦淫するなかれとか、神を恐れよとか、人間として絶対してはならないことを決めてあって、それ以外は何したっていいですよ、まあ極端に言えばそういう教育だと思うんですね。だから日本の教育と非常に

対角線上にあると思うんですが、どっちももちろん長所欠点はありますが、日本的なあまりに全部をやんなさいっていうのは、結局不可能なことをしている。そのためにその子どもを萎縮さすということが起こりうると思いますが、どうですか、先生。三好：確かに、私らは教育勅語に謳われているように生きなさいって教わりましたし、戦後、教育勅語が否定されたあとの教育基本法などでも、人格の完成を目指し、なんてありますから、そういう人格の完成した人って何かというと神様みたいなのが出てきますね。そういう意味では、ほんとに河合さんがおっしゃった、良いところを褒めているうちに欠点が個性になるっていう、人間の育ち方、育て方、とても魅力があります。それから、教わるよりも獲得するという部分が子どもにも大人にもとても大事だと思うんですが、河合さんは学校にはあんまり行かないし、勉強も得意でないっていうふうに書いておられますが、読書は好きだったんですね、小学校の時から。

河合：そうですね。ですから、何もしなければやっぱり駄目だったと思うんですが、特に当時はテレビとかラジオもないし、学校休んでるんで暇ですよ。そうするとやっぱり本読むしかしょうがないというところもありました。それと、幸いなことに、当時児童文庫というのがありましたよね。北原白秋の弟の北原鉄雄という人がアルス社から出してまして、全部で76巻くらいある。私は時々児童関係の出版社の人に言うんですけど、それを書いている人が当時の一流なんですよ。童話は島崎藤村、民話は柳田國男、詩は北原白秋が書いている、という風にですね。それで、動物編っていうのがありました。これは、京都大学の生態学講座をはじめられた、動物学の教授の川村多実二先生、そういう当代一流に子どもの本を書かせたんです。ところがまたその人たちが書いたっていうことがすごいと思うんです。非常に感動した話があって、私も子ども向けの本を時々書いてますが、自分が学ばねばならないと思うのは、京都大学に大総長っていわれた何人かの中に、浜田青陵っていう、日本の考古学の草分けの人がいます。その浜田青陵さんが『考古学』という本を書いているんですよ。で、その弟子の人が書いているのを見たんですが、浜田大先生は非常に大局的なことや、あるいは見通したこと、大きなことを開拓した。そのかわり細部は間違っていたり、非常に空想的なことがあるらしいんですね。そういうことを先生にいうと、それは君たちがやればいいんだと。そういう非

常に大らかなところもあったようです。ところが、そのアルス社から子どもの本を書けといわれて、それで書くと覚悟した時、大学を1ヶ月休んでその子どもの本に没頭するんです。子どもの本を書くときは、間違っただけを言っちゃならない。考古学は科学ですからね。科学として間違っちゃいけない、と言って、全身全霊をかけてお書きになった。それで、私らも子供の時に読みまして、もちろん、浜田青陵なんて人はどんな人か知りませんが、そういう精神や気遣は子どもに伝わるんですよね。だから小学校3年の時にもう「ドルメン」とか、変なもの覚えるんですね、その浜田先生のを読んで。その本は今でも考古学の名著らしくって、残るものですよ。で、3年程前に復刊になりました。そのくらい、大総長といわれる人で、ある面では大雑把なものを書く人が子どものものにも打ち込んだという点が、私は偉かったと思いますね。例えば大作家といわれる人でも、子どもの本だからというんで、ちょっと手を抜いたりする人もいますね。あれはまずいと思います。そういう児童文庫があったものですから、それを反復して読むわけです。それが大事ですね。理屈ではないんですよ。何べんも読む。ですから、ローレライとか、私はギリシア、ローマ神話の名前なんていうのはだいたいその頃覚えたものなんですよ。何べんも読むから覚えるわけです。だから、読書をうんとしたっていうのは、非常によかったなという風に思いますね。その点今、子どもが活字離れしているので、とても残念です。

三好：私は理科数学系統の人は、文学なんかとはあまり親しまないんじゃないかなんて思っていたんですが、河合さんは学校に行かないで成績も悪かったということを書いておられながら、やっぱり休んで読書をなさった。そして今のようなことですから、それが言葉として文章として、文章の原型として、こう脳裏に定着していったんですね。私は河合さんのご本を読んでいて、素晴らしい文章だと思いました。ところが私は作文が駄目だったと書いておられるんですが。

河合：そうですね。小学校の時1番嫌いだったのが作文なんです。子供の時っていうのはいくら怒られても平気な時は平気ですね。よく外に出て叩かれたりしましたけども、宿題は1回もしない。する気がしないわけです。で、作文が1番嫌い。ところがこれが面白くて、中学校4年の頃はわりと健康になったんですよ。4、5年の時に、文章に非常に興味を

持つようになりました。私は奥手ですから、小学校のとき蓄えたものがだんだんだんだん上手く発酵して、或いは、芽が伸びてきてくれたっていう感じがします。ですから、その時はほんとに文章に興味を持って、今度は、小説を読むにしろ、そういう目で読むようにしました。いわゆる基礎を作っとけば、それは伸びる時には伸びるんだなという気がします。

三好：まあ、そういう意味では、学校は休まれたが読書で自ら基礎学力を見事につけられたんだと思いました。そして、動物誌の中にある、タヒバリは中学時代でしたか、それとも高校時代？

河合：高校時代です。

三好：高校時代にタヒバリとイタチの2編を書いていらっしゃるわけですね。今日は時間が十分ありますから、『少年動物誌』のなかにある、若い頃に書いた部分を、チラッと読ませていただきます。ほんと名文といえますか、文学的な文章で生物のことを書いておられるんですね。「凍てついた鋼色の冬空を鋭く傷つけて黒い飛礫が放物線を描いて落ちていく。僕はその黒点にぴったり視線を合わせ、枯れ草の上に立ち尽くしていた・・・」どうですか。啄木も賢治も敵わないような名文ですね。河合さんは、文学者になろうとお思いになったのはいつでしたっけ。

河合：それはね、それを書いているところです。そのころは本当に身体が弱かって、旧制高校6年半ぐらい行っただけです。ちょうど戦争中で、私としてはそれが悔しかったですね。みんな友達に戦地へ出て行きますし、それこそ皆に祝福されてですね。けれども人生は不思議なもので本当に元気だったのはかなり戦死したわけですよ。だから私みたいに、病気でうんうん言ってたものが結局はこうして助かって、今でも生き残っているわけですからね。生き残った不思議を感謝しながら、まあ好きでしたから、文学でもやるかなんか思ってたんです。ところが、やっぱり、文学的才能がないということがよく分かったのですから、文学はあきらめたのです。その点、三好さんはずーっと作家になろう、そして、芥川賞、直木賞を取ろうって頑張っておられますよね。

(編集部よりおわび：河合・三好両氏の対談について、当日の録音体制の不備から、内容が途中で切れております。両氏および読者の皆さまに、謹んでおわび申し上げます。)

